

Close-up Interview (3月号 表紙の顔)

# 松永 裕美

HIROMI MATSUNAGA

## リスタイから素手に… 進化の先に見据える地平

この10年余りは、常に女子プロ界を牽引する存在として、数々の輝かしい記録を打ち立ててきた松永裕美プロ。昨年より適用された補助器具使用禁止のルールは、最大の試練になるかと思われたが、むしろ成長のために超えるべきハードルとポジティブにとらえていて、2021年はさらに進化した姿が見られそうだ。

### 高1で衝撃の 全国デビュー

多くのジュニアと同様、ボウラーだった両親の影響で、物心つく前からボウリングは身近な存在としてあり、意識することなくいつしか投げ始めていた。

「小さいころは、JBCで投げていたお父さんの試合に、いつもついていっていました。とくにプロアマの大会でプロボウラーを見て、カッコいいな、自分もなりたいたいと思うようになりました。中学に入るときに、父が親しくしていた柴田(英徳・11期)プロに『プロになりたいといっているから指導してくれ』とお願いして、当時柴田プロがいた下関ゴールデンボウル(現在は閉鎖)に毎日通って練習をしました。ボウリングだけでなく、近くの公園を走ったり、100段くらいの階段を何往復かさせられたりと、しごかれました(笑)」

中学卒業後は、父親の勧めでボウリング部のあった福岡第一高校に進み、寮生活を送る。

「学校が終わったら、寮からボウリング場まで自転車で20分ぐらいかけて行って、練習して、リーグを投げて、帰ったら門限の10時には間に合わない。寮の先生には『風呂は12時までには入れよ』って、大目に見てもらっていました。もちろんきついときもあったけど、楽しかったですね」

名前が一躍全国区になったのは、2000年の宮様チャリティーボウリング優勝だった。大人に交じって高校1年生が優勝をさらったのだから、それだけでも十分衝撃だったが、さらに翌年も連覇を飾ってみせた。

「当時は高校選手権も同じ品川(プリンスホテルボウリングセンター)で行われていたので、その予行演習ぐらいの意識だったように思います。まだ知識も



▲一昨年のジャパンオープンで16勝目を挙げ、永久シードにあと4勝とした

経験もないまま、無欲で投げたのがよかったのかもしれないですね」

最終学年の3年時、高校選手権と高校対抗の2冠を手土産に、そのままプロ入りか…と思いきや、プロテストの受験は翌04年だった。

「父や周りの人から、1年間は修行をすることを勧められて、福岡市のサンアローボウル(07年閉鎖)でバイトをしながら練習を積みました。翌年のプロテストは、ボールを握っていたせいでしょね、2次テストの最終日は親指の皮がむけて、血だらけで投げていた記憶があります」

### 永久シードを前に ややペースダウン

2次の最終日こそ苦しんだものの、3日目までの貯金を守ってトップ合格を果たした。37期として華々しくデビュー…のはずが、間もなくお腹に子供を宿し、産休に入る。

「2006年だったかな、復帰の年の順位戦で、何の予兆もなくいきなりイップスになったんです。そのときは何が起こって

いるのか理解していなかったけど、足が出ない、手も出ない、どうやって投げればいいのかからなくなりました」

常にその症状が出るわけではないが、現在に至るまで、イップスとの付き合いは続いている。そんななかでも、2009年には千葉女子オープンで初タイトルを獲得すると、12月の全日本女子プロ選手権も制し、ポイントランキング2位(アベレージは1位)など、一気に才能を開花させる。

「その年何がよくなったという感覚はないんです。それまでに2位や3位が何度かあって、それがいい経験になっていたと思います。またサンアローボウルで、愛甲恵子プロや川口富美恵プロ、男子でも古賀衛プロ、玉井慎一郎プロらと一緒に練習をさせてもらって、環境にも恵まれていました」

その後11年に初のランキング1位に輝くと、2度の3冠(13、17年)

を含む6度の1位、とくに師匠の柴田プロからこだわりのようにいわれているアベレージは8度の1位に輝いている。姫路麗とともに、ツートップとして近年の女子プロ界を牽引してきたが、15年終了時点で12勝で並んでいた

勝利数は、この5年で4勝とややペースダウンしたのに対し、姫路は永久シードの20勝もあっさりクリアして、25勝まで伸ばしている。

「勢いがすごいですよね。どうしたらあんなにポンポンと勝

てるのか、聞きたいです。『まだまだ若い子たちの壁になるうねっ』と言われるけど、今は姫路さん一人で頑張っている感じなので、私もそう言える立場になりたいです。永久シードについては、私自身は目の前の1勝をとって、特別な意識はないけど、父と柴田プロは『20勝目を見るまでは死なれん』と言っています(笑)」

### 20年ともに戦った メカテクと決別

昨年はリスタイが禁止になって初めてのシーズンだった。3年前のアナウンス後、早急に素手にした選手もいたが、2019年の最終戦までリスタイを着用して戦った。

「それは自信がなかったからです。中学生のときにマンガースをつけ、高校に入って練習量が増えて手を痛めたときに、メカテクターに替えて約20年になります。高校の後半

からは、自分の手に合わせて特注で作ってもらっていたので、まさに自分の手のようになっていました。素手になるのは、不安しかなかったです。年末に、素手用にドリルを変えたボールを小嶺シティボウル(北九州市)にたくさ

ん送ってもらって、年末年始は、営業のじゃまになるんじゃないか(笑) ぐらいの勢いで練習をしました」

20年の開幕戦、WOMEN'S ALL★STARを7位とまずまずの成績で終わると、コロナ禍

の影響で、試合は約半年の中断があったが、その期間もムダにはしなかった。再開後10月のAPAプレゼンツ K&Qで2位、さらに最終戦の全日本女子プロ選手権でも、トップシードで迎えた優勝決定戦、再決定戦を小林よしみに連敗して悔しい準優勝だったが、ポイントランキングを3位で終えた。

「全日本のTV決勝は、予想外の変化の仕方でした。全然手前のオイルがなくて、いちばん走るボールまで出しても対応できませんでした」

優勝こそなかったが、素手でのボウリングをポジティブにとらえている。

「リリースではじく癖があったのが、素手にしてからなくなり、腕の痛みも出なくなりました。球質も、サイドが入って今の方がよくなったと思います。ただ、投球精度はまだまだだし、自分で納得できるものがどこにあるのかを探っているところです。見ている人たちも、松永裕美はそんなんじゃないだろうという目で見ているから、プレッシャーもあります。まだまだ私は進化し続けます！そして『素手でも優勝したよ』と早く言いたいですね」



▲リスタイ禁止の最初の年をランキング3位で終えて「上出来です」という喜びの表情



まつながひろみ/1984年6月5日生まれ、山口県出身。右投げ。2004年プロ入り(37期/ライセンスNo.384)。優勝16回。ランキング1位6回(3冠2回含む)。2020年終了時点のポイントランキング3位。ABS所属。